

〈研究ノート〉

## 乳児保育の価値観の変容 —「担当制・流れる日課」の実践に注目して—

神谷良恵

### 要旨

乳児保育においては、待機児童解消の問題から量が優先され、質が問われている。保育所等で過ごす乳児への関りは、保育施設における理念や価値観によって大きく変化すると考えられる。そこで、本稿では日々の保育として現れる保育者の価値観に注目し、それらに変容することが乳児への関りとしてどのような影響をもたらすかについて明らかにすることを目的とした。特に乳児保育の質に関連し、乳児の主体としての思いや願いの受け止め方、一人一人に応じた応答的な関りに注目し、保育方法の違いによる価値観の変容をとらえた。その際、担当制・流れる日課の保育方法に注目し、一斉保育の保育方法からの価値観の変容を質問紙によってとらえた。

その結果「担当制・流れる日課」における価値観には、子どもを中心とした保育の関りがあり、子どもの利益のために、大人同士が連携するとともに、保育士一人一人が、子どもに寄り添い、理解して応答的に関わることで常に一人一人の乳児を主体とした価値観が存在していることが明確となった。

一方で一斉保育の方には子どもを中心とする価値観は浮かび上がらなかった。それは、子どもを大人に合わせる大人主体の保育であったために、一人一人の子どもへの理解が不十分であり、子どもの利益や子どもを大切にすることに繋がらなかったといえる。

キーワード：価値観の変容、担当制・流れる日課、一斉保育

## 1、背景と目的

待機児童問題の解決策として、3歳未満児を対象とした保育所等施設は増加傾向にある。「保育所関連状況とりまとめ（厚生労働省2019a）によると、平成27年度から平成31年にかけて、保育所は23,533か所から23,573か所と差はないが、幼保連携型認定こども園は1,931か所から5,140か所、幼稚園型認定こども園は582か所から1,175カ所、特定地域型保育事業は2,737か所から6,457か所に増えており、全体数は28,783か所から36,345か所に増えている。これに伴い平成31年4月には、3歳未満児全体の37.8%である1,096,250人が保育所等を利用している。また、同資料によると、待機児童数は平成31年4月1日時点で16,772人であり、前年度平成30年4月1年の19,895人に比べ3,123人の減少が見られているが、全体の待機児童数のうち、1・2歳児は12,702（75.7%）であり、3歳未満時の保育（以下乳児保育）は今後も継続して求められるといえる。

乳児保育における対象の子どもは、0歳児から2歳児であり、「一般的に保育所では、0歳児から2歳児の子どもを乳児または未満児」と呼んでいる（神谷2018）ことから、本稿においては、0歳児から2歳児の子どもを乳児とし、1歳未満までの子どもを乳児とする児童福祉法と区別する。

先述したように、待機児童の解消を機に乳児保育においては、量的な問題に注目されがちであるが、乳児にも主体としての権利がある（UN Committee on the Rights of the Child2006）。乳児が健全に育つためには、アタッチメントや応答的な関り、ケアが重要であり（初塚2014、神谷2018、2019）、保育所保育指針（厚生労働省2017）においても乳児保育および1歳以上3歳児未満児の保育の内容の取扱いの中で、一人一人に応じた応答的な関りや適切な援助を行うことが求められている。このように、現状の日本の乳児保育においては、野澤ら（2016）も指摘するように量だけ

ではなく「子どもの豊かな生活や健やかな発達のための保育の『質』」が問われている。

また、保育の「質」に関する評価基準は、多くの国において理念から始まり、保育の価値観、続いて具体的な保育計画、保育方法へと細分化されている（厚生労働省2019b）。

現在の保育方法は、一斉保育、自由保育、異年齢保育、コーナー保育、モンテッソーリやシュタイナーなどの思想家や実践家による理念に影響を受けた保育方法などがあり（大豆生田2020）、保育所保育指針（厚生労働省2017）では、保育方法において「子どもが安心感と信頼感を持って活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること」とある。特に、特に保育に関わるねらい及び内容では、その基本事項に「特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆<sup>きずな</sup>が形成されるといった特徴がある」ため、「乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である」と述べられている。同様に、1歳以上3歳未満児の保育においても「自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わることが必要である」と述べられている。つまり、3歳未満児までの乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われる必要があると言える。

しかし、近年現場においては待機児童解消に向けて、一部屋に24人もの乳児を4人の保育士で保育することも珍しくなく（神谷2018）、どのようにすれば、愛情豊かに応答的に保育を行い、一人一人の子どもが安心感と信頼感が持てるのか疑問である。特に一斉保育は、「園や保育者が子どもに身につけてほしいと願う内容をクラスの子どもたちに同じ方法や時間で行う保育（松浦2020）」であり、乳児においては個人差の大きい排泄の間隔や食事時間、睡眠時間においても一律の時間で行われるため、一人一人に応じた応答的な関りや適切な援助を行うことができるのか疑問である。

日々の保育は、理念やそれに基づいた価値観から出発しており、日々の関りとして様々な保育方法の中で具現化されて行われている。そのため、保育

所で過ごす乳児への関りは、保育施設における理念、価値観、保育方法などによって大きく変化する。

そこで、本稿では特に日々の保育として現れる根源となる保育者の価値観に注目し、それらに変容することが乳児への関りとしてどのような影響をもたらすかについて明らかにすることを目的とする。特に乳児保育の質に関連し、乳児の主体としての思いや願いの受け止め方、一人一人に応じた応答的な関りに注目し、保育方法の違いによる価値観の変容をとらえる。

その際、「一人一人の子どもを大切にする」ことを視点としている「担当制・流れる日課」に着目する。この保育方法は人格を尊重するためにハンガリーで考案された乳児の保育方法の一部であり、1972年ころからコダーイ芸術教育研究所によって日本に導入されている（コダーイ芸術教育研究所、2005）。一人一人の乳児が特定の大人との関係を基盤にし、安心し、安定して保育施設で生活できるとして近年注目されている（コダーイ芸術教育研究所2006、サライ2014、伊藤ら2015、山本2015、神谷2018、2019、西村2019）。担当制に関しては「育児担当制」と呼ばれることもあるが、本稿では「担当制」として統一する。また、本調査では、「一人一人の子どもを大切にする」視点から、「保育方法による価値観の変容がもたらす子どもへの関り」の意義を捉えることを目的とするため、「担当制・流れる日課」の保育方法を実践している保育施設の中でも一斉保育の経験をもつ保育士の多いY保育室を対象とした。

## 2、研究方法

### 2-1 調査概要

研究協力施設と研究協力者

#### (1) Y保育室

Y保育室は、創立3年目となる小規模保育事業の保育室であり、「一人一人を大切にする」ことを理念とし、ハンガリーから導入された保育方

法を実践している。

子どもの定員は、0歳児から2歳児の19名であり、職員数は施設長を含む保育士8名、調理員1名の9名である。クラスは、0-1歳児と1-2歳児の2クラスにそれぞれ担任が2名ずつ配属されており、主に4名の職員が子どもの保育を行っている。同時に、時間差勤務や保育補助、食事を通して他の4名の保育士、調理員が保育に関わっており、定期的な話し合いや研修を通して、理念である「一人一人を大切に作る保育」の具体的な実践を試みている。

そのため、保育室の環境はそれぞれのクラスの子どもたちの身体的発達や認識の発達、興味・関心に見合った遊具や道具が十分にあり、それらであそぶことのできる時間と空間が工夫されている。

## (2) 研究協力者

研究協力者は、Y保育室の保育士8名を対象とした。このうち4名の職員は創立時に保育室の理念である「一人一人を大切に作る」保育に賛同し、保育方法の異なる保育園から転勤している。そのため、その他の保育方法を振り返りながら「担当制・流れる日課」の特徴を捉えることができると考えた。なお、今回は保育方法による保育士の変容に関する調査のため、調理員の職員には依頼しなかった。

## 2-2 調査の方法

質問紙により、以下の項目を選択または自由記述にて回答を求めた。

### (1) 期間

- 1) 配布：2020年3月10日
- 2) 回収：2020年3月31日

### (2) 質問項目

#### 1) 職員について

研究協力者の性別、年齢、勤務形態、Y保育室勤務年数、その他の

保育所勤務年数、現在の担当年齢について尋ねた。そのうち、性別、年齢、勤務形態は選択番号より選び、Y保育室勤務年数、その他の保育所勤務年数、現在の担当年齢については、記述の回答とした。

## 2) 保育方法について

乳児を0歳児から2歳児と限定したうえで、乳児クラスで実践したことのある保育方法について尋ねた。「一斉保育」、「担当制・流れる日課」、「その他」の選択番号から選ぶようにし、その他の場合は具体的な保育方法を記述できるようにした。また、それぞれの保育方法において、保育所保育指針（厚生労働省2017）に基づき、以下の設問において最も当てはまるものを4つの段階から選択するようにした。

ア、「子どもの主体としての思いや願いを受け止めること」について  
イ、「愛情豊かに応答的に行われること」について

なお、「一斉保育」とは、一般的にクラスにいる子ども全員が同じ時間に食事、排せつ、着替え、活動、あそびなどを行う方法である。

一方、「担当制・流れる日課」とは、クラス全員が同じ時間に同じことをせず、一人一人の乳児が、自分のペースで食事、排せつ、睡眠、着替え、活動、あそびなどを行うことができる方法である。

「担当制」とは、食事、排泄、睡眠、清潔など生命の維持に必要なケアを育児と称し、クラス担任の保育士それぞれが決まった子の育児を1年間担当することである（コダーイ芸術教育研究所2006、サライ2014、神谷2018、2019）。また、「流れる日課」とは、担当制における育児での乳児と保育士の関わりと、一人ひとりの乳児のあそび時間の保障を試みるものである。保育士は、自分の担当児の日課に合わせて個々に育児のケアをすると同時に、担当児の育児が必要ない間は、担当児に関係なくあそんでいる乳児全員を見守る（コダーイ芸術教育研究所2006、サライ2014、神谷2018、2019）。本稿では、「担当制」と「流れる日課」を合わせ、「担当制・流れる日課」とし

て統一する。

3) 乳児保育の価値観について

現在の保育方法：担当制・流れる日課を実践する中で、乳児保育における「価値観：大切に思うこと」について自由記述するとともに、以前と変化がある場合は、理由を自由記述するようにした。

4) 保育士の価値観について

現在の保育方法：担当制・流れる日課を実践する中で、保育士の役割における「価値観：大切に思うこと」について自由記述するとともに、以前と変化がある場合は、理由を自由記述するようにした。

5) 気づきや疑問について

現在の保育方法：担当制・流れる日課を実践する中で、気づいたことや疑問に思うことがある場合は、自由記述するようにした。

(3) 倫理的配慮

研究協力施設に出向くとともに、研究協力保育士に面会し、口頭及び文章説明の上、写真掲載を含む研究発表の許可を得た。また、今回の研究におけるデータ使用において、2019年同朋大学倫理委員会の審査において承諾を得ている（承認番号2019-14-02）。

## 2-3 分析方法

質問紙のアンケートを元に以下の方法で分析した。

(1) 表・グラフによる可視化

上記の質問項目のうち、選択による回答を集計し、表またはグラフとして示した。

(2) KJ法的分類による可視化

上記の質問事項のうち、記述による回答をそれぞれの項目ごとにKJ法（境2012）を参考に分類して図解化するとともに、さらに表としたのち文章化した。

### 3、結果

#### 3-1 Y保育室の保育士について

配布した8枚の質問紙から8枚の回答を回収した。回収率は100%であった。

研究協力者の性別は全て女性、年代は「30代」1名、「40代」3名、「50代」3名、「60代」1名であり、雇用形態は、「正規」、「非正規」とともに4名であった。現在の勤務年数は、Y保育室は全員「3年未満」であり、その他の保育施設は、「3年」2名、「8年」1名、「10年」2名、「17年」1名、「30年」1名、「35年」1名であった(図1)。また、図1より、Y保育室とそれ以外の保育施設での保育士としての経験年数は合計「4年から10年未満」が2名(3、4)、「10年から20年未満」が4名(1、2、5、8)、「30年から40年未満」が2名(6、7)であり、8名中6名の75%は、保育経験が「10年以上」であった。また、Y保育室とそれ以外での経験年数を比較すると、Y保育室とそれ以外の保育施設での経験年数が同じ職員が1名(4)、Y保育室よりも他の保育施設での経験年数が多い職員が7名(1、2、3、5、6、7、8)であった。

このことからY保育室の職員は、保育経験が10年以上のベテランが多く、Y保育室での経験年数よりもそれ以外の保育施設での経験年数の方が多いことが分かった。



## 乳児保育の価値観の変容

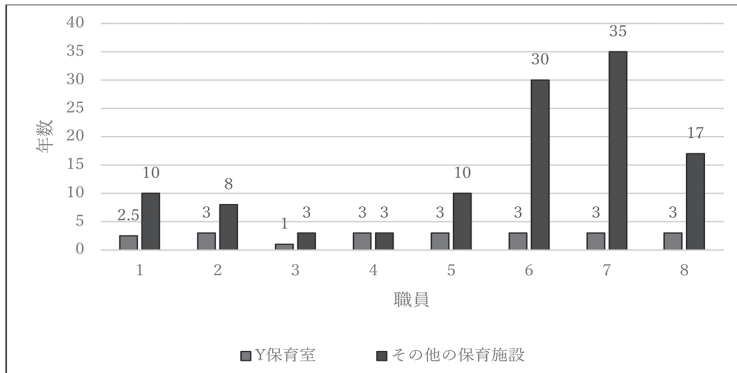


図 1 勤務年数

### 3-2 乳児の保育方法について

#### (1) 経験したことのある保育方法

Y保育室の保育士が現在までにどのような保育方法の経験があるかを調査した。その結果、Y保育室の保育方法である「担当制・流れる日課」が8名、「一斉保育」が7名、「その他」が2名であった。「その他」は、回答した2名の自由記述から「ゆるやかな担当制・流れる日課」と「乳児院のなかでの担当制」であり、いずれもY保育室と異なる方法の「担当制」であったと推測されるが、ここでは「その他」として分類する。

上記より、Y保育室では主に「担当制・流れる日課」、「一斉保育」の2つの保育方法の経験者が5名、「担当制・流れる日課」、「一斉保育」、「その他」の3つの保育方法の経験者が2名、「担当制・流れる日課」の保育方法のみの経験者が1名であった。

このことから、1名を除きY保育室の7名、87.5%の保育士は「担当制・流れる日課」と「一斉保育」の2つの保育方法の経験者であることが分かった。これを基に、「一斉保育」と「担当制・流れる日課」

を主な比較対象とするとともに「その他」も参照しながら、保育方法による乳児への関りの違いを以下に示す。

(2) 保育方法による乳児の「主体としての思いや願い」の受け止め方

保育所保育指針（厚生労働省2017）第1章総則には、保育所保育に関する基本原則の中に「保育の方法」として「子どもが安心感と信頼感をもって活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること」と述べられている。これに基づいて一人一人の乳児を対象に保育方法によって、保育士がどの程度乳児の「主体としての思いや願いを受け止めること」ができたかについて調査、集計したデータをグラフにした（図2）。

これを基にそれぞれの保育方法において、どの程度保育士が乳児に対して「主体としての思いや願い」を受け止めることができたかを以下に示す。

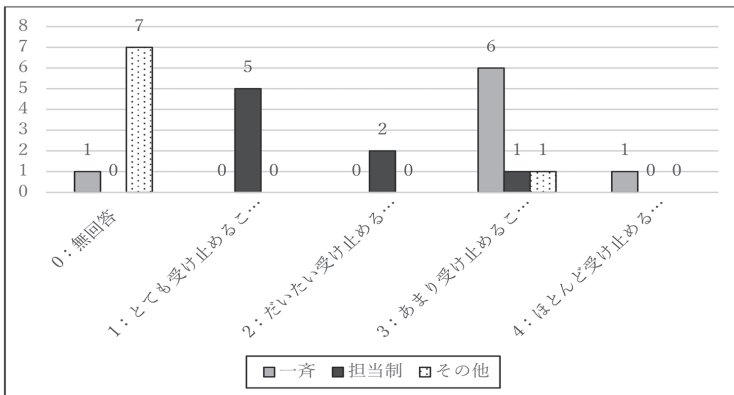


図2 乳児を主体として受け止められているか

1) 斉保育

「あまり受け止めることができなかった」が6名、「ほとんど受け

止めることができなかった」1名、「無回答」が1名であった。また、「とても受け止めることができた」「だいたい受け止めることができた」はいずれも0名であった。このことから回答した7名の全ての保育士が乳児の「主体としての思いや願いを受け止めること」に関して「できた」と肯定的に捉えていた保育士は0%、「できなかった」と否定的にとらえていた保育士は100%であり、「一斉保育」において乳児の「主体としての思いや願いを受け止めること」は、保育士にとって実践することが難しい内容であったと考えられる。

## 2) 担当制・流れる日課

「とても受け止めることができた」が5名、「だいたい受け止めることができた」が2名、「あまり受け止めることができなかった」が1名であった。また、「ほとんど受け止めることができなかった」「無回答」はいずれも0名である。このことから、「できた」と肯定的に捉えていた保育士は7名で87.5%、「できなかった」と否定的に捉えていた保育士は12.5%であり、「担当制・流れる日課」において乳児の「主体としての思いや願いを受け止めること」は、保育士にとって実践しやすい内容であったと考えられる。

## 3) その他

「あまり受け止めることはできなかった」が1名、「無回答」が7名であった。また、「とても受け入れることができた」「だいたい受け入れることができた」「ほとんど受け入れることができなかった」はいずれも0名であった。その他の保育方法の経験のある回答者は2名であったことから、回答者のうち1名は無回答であったと言えるがもう1名は「できなかった」と否定的に捉えていた。そのため、「その他」の保育方法において、乳児の「主体としての思いや願いを受け止めること」は、回答した1名の保育士にとっては保育する中で実践することが難しい内容であったと考えられる。

#### 4) 考察

上記のことから、一人一人の乳児の「主体としての思いや願いを受け止めること」は、「一斉保育」においては「あまり/ほとんど受け止めることができなかった」との回答が100%であった。これに対して「担当制・流れる日課」においては「とても/だいたい受け止めることができた」との回答が87.5%と大多数を占めていた。

先述したように、「主体としての思いや願いを受け止めること」は、乳児、幼児に関わらず「子どもが安心感と信頼感をもって活動できる」ために示された「保育の方法」である。これを踏まえると、保育所で一日の大半を過ごす乳児が「安心感と信頼感をもって活動できる」ことは、「一斉保育」においては難しく、「担当制・流れる日課」の保育方法においては可能性の高い内容であると言える。

#### (3) 保育方法による「愛情豊かに応答的に行われること」について

先述したように保育所保育指針（厚生労働省2017）では3歳未満までの乳児保育において「愛情豊かに、応答的に行われること」の必要性が述べられている。これに基づいて一人一人の乳児を対象に、保育方法によって保育士がどの程度「愛情豊かに、応答的に（保育を）行うこと」ができたかについて調査集計し、データをグラフにした（図3）。

これを基にそれぞれの保育方法において、どの程度保育士が乳児に対して「愛情豊かに応答的に行うこと」ができたかを示す。

## 乳児保育の価値観の変容

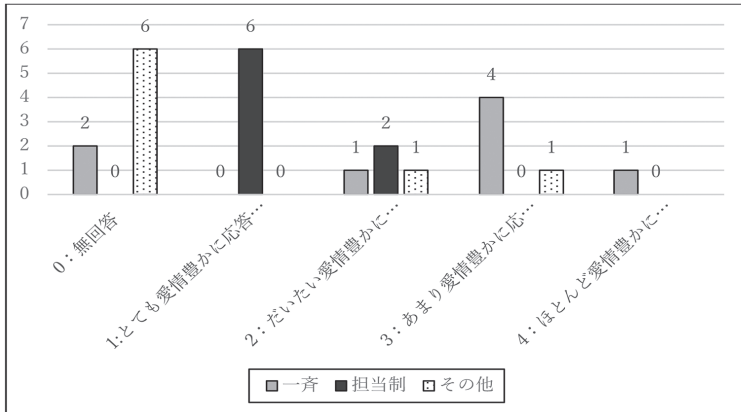


図 3 乳児への愛情豊かな応答性

### 1) 一斉保育

「だいたい愛情豊かに応答的に行うことができた」が1名、「あまり愛情豊かに応答的に行うことができなかった」が4名、「ほとんど愛情豊かに応答的に行うことができなかった」が1名、「無回答」が2名であった。なお、「とても愛情豊かに応答的に行うことができた」は0名であった。このことから回答した8名の保育士のうち「できなかった」と否定的に捉えている保育士が5名で62.5%、「できた」と肯定的に捉えている保育士が1名で12.5%であり、「一斉保育」において乳児保育を「愛情豊かに応答的に行うこと」は、保育士にとって実践することが難しい内容であったと考えられる。

### 2) 担当制・流れる日課

「とても愛情豊かに応答的に行うことができた」が6名、「だいたい愛情豊かに応答的に行うことができた」が2名、「あまり愛情豊かに応答的に行うことができなかった」「ほとんど愛情豊かに応答的に行うことができなかった」「無回答」は、いずれも0名であった。こ

のことから、回答した8名のうちできた」と肯定的に捉えている保育士が8名で100%、「できなかった」と否定的に捉えている保育士は0名で0%であった。このことから、「担当制・流れる日課」において乳児保育を「愛情豊かに応答的に行うこと」は、どの保育士にとっても実践できる内容であったと考えられる。

### 3) その他

「だいたい愛情豊かに応答的に行うことができた」が1名、「あまり愛情豊かに応答的に行うことができなかった」が1名、「とても愛情豊かに応答的に行うことができた」「ほとんど愛情豊かに応答的に行うことができなかった」はいずれも0名であった。また、「無回答」は6名であり、8名のうちその他の保育方法の経験者が2名であることに起因していると考えられる。このことから、「その他」の保育方法において「できた」と肯定的に捉えている保育士も「できなかった」と否定的に捉えている保育士もそれぞれ1名であり、「その他」の保育方法において乳児保育を「愛情豊かに応答的に行うこと」は、保育士にとって、実践しにくいとも実践しやすいとも言えない。

### 4) 考察

上記のことから、一人一人の乳児を「愛情豊かに、応答的に（保育を）行うこと」ができたかについては、「一斉保育」では、「あまり/ほとんど愛情豊かに応答的に行うことができなかった」との回答が62.5%で過半数を超えている。一方「担当制・流れる日課」では「とても/だいたい愛情豊かに応答的に行うことができた」との回答が100%であった。

先述したように、「愛情豊かに応答的に行うこと」は、乳児保育だけでなく1歳以上3歳未満児に関わる「ねらい及び内容」として保育所保育指針に示されており（厚生労働省2017）に、3歳未満児までの乳児期における特徴を踏まえた質の高い保育を行うには、「一斉保育」

よりも「担当制・流れる日課」において、実践しやすいと言える。

### 3-3 乳児保育の価値観

現在の保育方法である「担当制・流れる日課」を実践する中で「大切だと思うこと」を価値観として調査し、8名の保育士から自由記述による回答を得た。この回答のそれぞれの文をできる限り一文に区切ったところ、25の文に分かれた。これをKJ法的にグループ化したところ、8グループに分類でき、更に大きく2つのグループに分類された。これを以下に表1として示したのち、図解化した（図4）。

表1 「担当制・流れる日課」における乳児保育の価値観

大グループ	小グループ		
人に関すること (23)	子ども一人一人の利益 (6) ・一人一人が丁寧に大切にされること・子ども一人一人が尊重され、主体的に生活できること・子どもが見通しを持って主体的に生活できること・安心して生活できること・待たせない、急がせないことで各々のペースで、各々の日課に沿って安心して過ごせること・安心して思う存分に遊べること		
	子どもと大人の相互関係 (2) ・子どもと担当との信頼関係・子どもも大人も一緒に過ごす中でお互いに生きる喜びが感じられること		
	保育士一人一人の保育 (10)		
	子どもの見方 (6) ・まなざし・確かな目で見守ること・育児面で情緒的につながり、愛情豊かに子どもを見る・子どもの様子をよく見る・「子どもたち」を観るのではなく、目の前の一人一人の子どもを観ること・今だけでなく過去からのつながりでその子を観て未来へとつなげていくこと	子どもの内面の理解 (3) ・子ども一人一人の思いを大切にすること ・その子の発達の段階や情緒の変化など、理解して関わること・見えない部分(心の動き)こそが大切	心情 (1) ・育児する時間を楽しむ
	大人同士の連携 (2) ・大人同士の連携・保育士同士の連携を取りながら話し合い、共通の理解を持つ		
	その他 (3) ・子どもを信じる・一人一人を大切にすることができる環境・人の環境		
人以外の環境に関すること (2)	時間的な環境		
	物の環境		

(1) 「担当制・流れる日課」の実践における乳児保育の価値観

表1より、乳児保育の価値観は以下のグループに分類された。

1) 人に関すること (23)

① 子ども一人一人の利益 (6)



「一人一人が」「大切にされること」、「主体的に生活できること」、「安心できること」、「遊べること」など乳児一人一人の子どもが主語となっており、子どもの利益に直接関連していた。

②子どもと大人の相互関係（2）

「信頼関係」や「お互いに」など乳児と大人の相互関係によって成り立っていた。

③保育士一人一人の保育（10）

それぞれの保育士がどのように保育しているかに関連していたため、以下のア～ウに記す3項目をまとめた。

ア、子どもの見方（6）

「確かな目で見守る」、「目の前の一人一人の子どもを」未来を見据え「過去からのつながりで」など、どのように子どもを見るかということに関連していた。

イ、子どもの内面の理解（3）

「思い」、「発達の段階や情緒の変化」、「心の動き」などを大切にしたり関わったりすることなど、子どもの内面の理解に関連していた。

ウ、心情（1）

「育児するときに楽しむ」という保育士の心情に関連していた。

④大人同士の連携（2）

「大人同士の連携」、「保育士の連携」という大人同士の連携に関連していた。

⑤その他（3）

「子どもを信じる」、「一人一人を大切にすることができる環境」とあり、上記のいずれにも分類できなかったが、保育士の信念や人的な環境として「人に関すること」の大項目に分類した。

2) 人以外の環境に関すること (2)

「時間的な環境」、「物の環境」とあり、人的ではない環境に関連していた。

(2) 子ども一人一人の利益に向かう保育

ここでは、分類した項目を図式化し項目を関連付けた(図：4)。

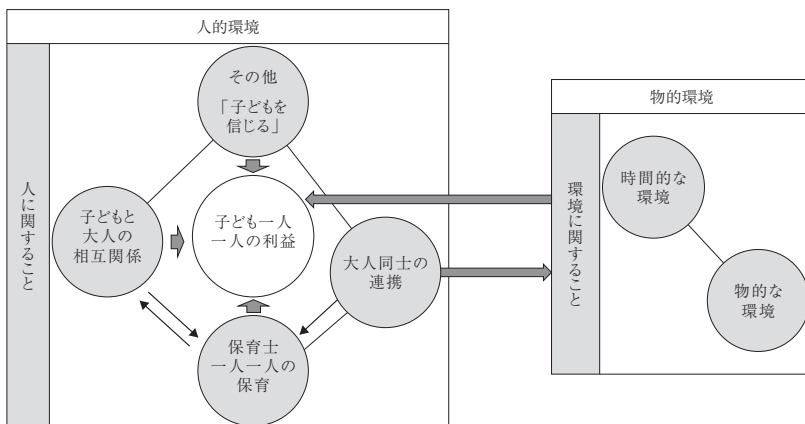


図4 子ども一人一人の利益に向かう保育

1) 人的環境

表1における「人に関すること」は「人的環境」として一つのグループとして、「環境に関すること」は、「物的環境」として表した。人的環境に含まれる「子どもと大人の相互関係」、「保育士一人一人の保育」、子どもを信じる「その他」の項目は、全て「一人一人の子ども」に直接影響がある。先述したように「子ども一人一人の利益」には、「大切にされること」、「主体的に生活できること」、「安心できること」、「遊べること」の内容が含まれている。これらは、「信頼関係」の内容を含む「子どもと大人の相互関係」や「その他」の「子どもを信じること」によって、安心できる状態が保たれ、

## 乳児保育の価値観の変容

目の前の一人一人の子どもの思い、発達、心の動きに注目して理解する内容を含む「保育士一人一人の保育士」をもって、子どもが「大切にされること」を感じられる要因になっていると考えられる。また、そうした保育士一人一人の「大人の連携」によって、一人一人の子どもについて共通理解されるため、全ての項目は、「子どもの利益」に向かって機能することが、乳児保育の価値観として浮かび上がった。

### 2) 物的環境

これは、「時間的な環境」と「物的環境」の2つの要素があるが、具体的な内容については記述がなく、記述数の少なさとともに乳児保育の価値観においては、あまり重視されていないと言える。

### 3) 考察

上記から、「担当制・流れる日課」においては「子どもと大人の相互関係」、「大人同士の連携」が共に「子どもを信じること」と関連するとともに、「保育士一人一人の保育」と相互に因果的であった。また、「子どもと大人の相互関係」は信頼関係が含まれており（表1）、「その他：子どもを信じる」、「保育士一人一人の保育」とともに「子ども一人一人の利益」に向かっていると考えられる。また、「大人同士の連携」は、打ち合わせなどの共通理解から「物的な環境」に直接働きかけ、影響することから、物的環境をくぐって「子ども一人一人の利益」に還元されていると考えられる。

## (3) 乳児保育の価値観の変容

乳児保育の価値観について、以前と変化があった場合は記述を求めた。8名のうち7名が記述しているため、82.5%の保育士が以前の保育方法と現在の保育方法では、乳児保育の価値観が変容したことが分かった。しかし、価値観の変化の理由として明確であった記述は、「担当制・流れる日課を始めて気づいた」「流れる日課・担当制をしてははじめ

て、その意味が分かった」の2つであり、以前の保育方法の違いが乳児の価値観の変容に影響していたことが分かった。一方で、価値観が変容した理由ではなく、「一斉保育」と「担当制・流れる日課」の違いや保育の中での気づきや感想、自分自身の保育の変化に関する記述が多くみられた。そのため、これを基に「一斉保育」と「担当制・流れる日課」の違いについて後述する。

### 3-4 保育士の役割

「担当制・流れる日課」を実践する中で「保育士の役割」において「大切だと思うこと」を価値観として調査し、8名の保育士から自由記述による回答を得た。この回答のそれぞれの文をできる限り一文に区切ったところ、20の文に分かれた。これをKJ法的にグループ化したところ、7グループに分類でき、更に大きく2つのグループに分類された。これを以下に表2として示したのち、図解化した（図5）。

乳児保育の価値観の変容

表 2 「担当制・流れる日課」における保育士の役割における価値観

大グループ	小グループ
<p>子どもを大切にしたい関わり (11)</p>	<p>子どもを主体として関ること (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが主体的に決めて行動できるように、必要な部分だけ手助けし、見守り、待つ姿勢を大切にすること</li> <li>・子どもに分かりやすくやり方を伝える</li> </ul>
	<p>子どもとの信頼関係を結ぶこと (4)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもと信頼関係を結び、安心できるようにすること</li> <li>・信頼する力・子どもを信じて待つ・困ったことがあったら助けしてくれる、この人がいるから安心という信頼関係 (を作る)</li> </ul>
	<p>子どもに寄り添うこと (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その子の抛り所になること</li> <li>・子どもを丸ごと受け止める</li> </ul>
	<p>応答的に丁寧に関ること (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども自身の成長するための要求に応えること (お腹がすいた、眠い、のぼりたいなど)</li> <li>・育児では、子どもの成長に合わせて助けていき、困ったことがおきた時には支援していくことを一人一人に対して丁寧に行うこと</li> </ul>
	<p>子ども理解 (1)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日同じ人が関わることで「この子はここまで自分でできる」「いつもでいるけど、今日はやりたくないんだ」と理解した上で声掛けができる。</li> <li>・子どもを知ることが大切</li> </ul>
<p>環境を整えること (9)</p>	<p>人的環境 (5)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが見通しを持って安心して過ごせる保育士の動き・育児行為を1対1で行うことで、愛着関係を深めて保育室が安心できる場所となるよう</li> <li>・子どもの喜びや悲しみなど気持ちに寄り添う担当がいつもいること</li> <li>・大人同士の関係を良くして、大人も見通しを持って過ごすこと</li> <li>・大人同士の連携 (をもつ)</li> </ul>
	<p>物的環境：時間・空間・遊具 (3)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びたいと思う遊具がそばにあること</li> <li>・子どもが見通しを持って安心して過ごせる日課 (にすること)</li> <li>・分かりやすい生活の流れにする</li> </ul>
	<p>その他 (1)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人的にも物的にも整えること</li> </ul>

表2より、保育士役割の価値観は以下のグループに分類された。

(1) 子どもを大切にしたり関わり (11)

①子どもを主体として関ること (2)

「子どもが主体的に決めて行動できるように」、「子どもに分かりやすく」など、子どもを主体とする観点に関連していた。

②子どもとの信頼関係を結ぶこと (4)

「子どもと信頼関係を結び」、「信頼する力」、「子どもを信じて待つ」など、子どもと信頼関係を結ぶことに関連していた。

③子どもに寄り添うこと (2)

「抱き所になる」、「丸ごと受け止める」など子どもに寄り添うことに関連していた。

④応答的に丁寧に関ること (2)

「要求に応える」、「一人一人に対して丁寧にしていく」など、応答的に丁寧に関わることに関連していた。

⑤子どもを理解すること (1)

「理解した上で声掛けができる」、「子どもを知ることが大切」など、子どもを理解することに関連していた。

(2) 環境を整えること (9)

①人的環境 (5)

「保育士の動き」、「担当がいつもいること」、「大人同士の関係を良くして」など人的な環境に関連していた。

②物的環境：時間・空間・遊具 (3)

「遊びたいと思う遊具」、「安心して過ごせる日課」、「分かりやすい生活の流れ」など時間・空間・遊具の物的環境に関連していた。

③その他 (1)

「人的にも物的にも整えること」と環境そのものであった。

## 乳児保育の価値観の変容

これを用いて分類した項目を図式化し項目を関連付けた（図：5）。これにより、「担当制・流れる日課」における保育士の役割としての価値観として「子どもを大切にしたい関り」を真ん中とし、「環境を整えること」の中で特に「人的環境」と深く関わっていた。これにより、保育士の役割としての価値観は、「子どもを大切にしたい関り」として、人的環境として繋がり、「子どもを理解すること」、「子どもに寄り添うこと」、「応答的に丁寧に関わること」、「子どもと信頼関係を結ぶこと」、「子どもを主体として関わること」の内容を含むことが分かった。

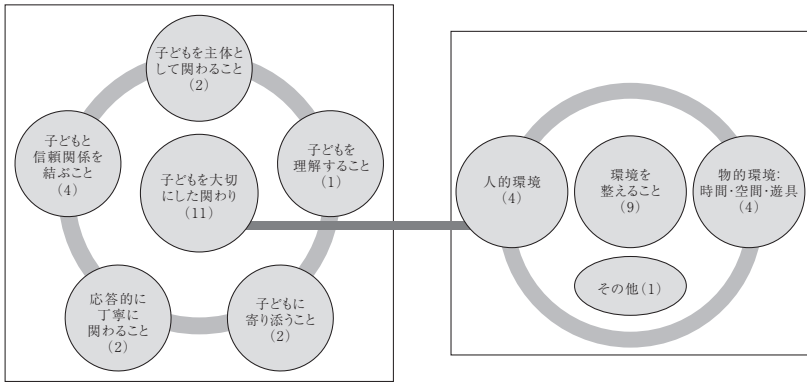


図 5 子どもを大切にしたい関り

### (3) 保育士の役割の価値観の変容

保育士の役割の価値観について、以前と変化があった場合は記述を求めた。

8名のうち6名が記述しているため、75%の保育士が以前の保育方法と現在の保育方法では、保育士の役割の価値観が変容したことが分かった。しかし、価値観の変化の理由として明確であった記述は、「一斉をやめて（省略）分かった」の1つであり、「担当制・流れる日課」の実践が保育士の役割の価値観の変容に影響していたことが分かった。

一方で、価値観が変容した理由ではなく、「一斉保育」と「担当制・流れる日課」の違いや保育の中での気づきや感想、自分自身の保育の変化に関する記述が多くみられた。そのため、これを基に「一斉保育」と「担当制・流れる日課」の違いについて後述する。

### 3-5 その他：気づきや疑問について

現在の保育方法である「担当制・流れる日課」を実践する中で、気づきや疑問に思うことがある場合の回答として8名のうち4名から自由記述の回答を得た。また、3-3 (3)：乳児保育の価値観の変容および3-4 (3) 保育士の役割の価値観の変容においても、現在の保育実践による気づきや疑問が含まれていたため、ここに合わせた。それらの回答をできる限り短い意味の通じる一文にしたところ、44の記述となった。そのうち、「一斉保育」が21で48%、「担当制・流れる日課」が22で50%であり、「一斉保育」と「担当制・流れる日課」を合わせると43で98%と関心が高かった。そこで、「一斉保育」と「担当制・流れる日課」を比較して表にした。

表3 「一斉保育」と「担当制流れる日課」の違い

保育方法	一斉保育 (21)	担当制・流れる日課 (22)
保育内容	大人主体の保育：子どもを大人に合わせる (5)	子ども主体の保育：一人一人の子どもを大切にする (4)
保育の実践	保育士自身の反省 (8)	保育士自身の変化 (5)
子ども理解	一人一人の子どもへの理解が不十分 (4)	一人一人の子どもを尊重し、多面的な理解に努める (6)
疑問	子どもの意思や思いの尊重がない (2)	出勤日の少ない保育士の子どもの関わり方 (1)
課題	保育の質の向上 (2)	保育士自身の学び、実践力の向上 (4) 大人同士の共通理解 (2)



(1) 「一斉保育」と「担当制流れる日課」の違い

1) 保育内容

「一斉保育」では、「大人の動きに子どもを合わせている」、「大人の思うように動かす」、「保育士が主役」、「子どもが見通しを持って主体的に生活できず」など大人が主体となる記述であった。これに対し、「担当制・流れる日課」では、「子どもも見通しが分かりやすい」、「子どもが主役」、「一人一人に寄り添える」など、子どもを主体とする記述であった。

2) 保育の実践

「一斉保育」では、「ムダな言葉がけやいやらない言動が多かった」、「怒ること」や「待たせること」が「多かった」、「一人一人に寄り添うことができなかった」など、保育士自身が当時できなかったことを反省する内容であった。一方で「担当制・流れる日課」では、「子どもにあった援助、助け、家庭支援」を「考えるようになった」、「子どもの遊び、まなざしをお互いに感じるようになった」、「つながっていることを実感できるようになった」など、保育士自身ができるようになった変化を肯定的に捉えていた。

3) 子ども理解

「一斉保育」では、「変化のある生活の方が子どもは喜ぶと思っていた」、「子どもが工夫して遊んでも認められることはなかった」、「保育園と家庭での姿が大きく違う」など、一人一人の子どもに対する理解が十分ではなかった。一方で「担当制・流れる日課」では、「子どもは主体的に動ける力がある」、「子どもを尊重する大切さが分かった」、「色々な切り口から子どもを見つめられる」、「家庭と変わらない姿が多くある」など、多面的に子どもを理解しようと努める保育士の姿勢があった。

4) 疑問

「一斉保育」では、「大人のテクニックで子どもを大人の思うように動かすこと」、食事を大人のペースですすめ、「ムリに口を開けさせて、大人が入れること」など、子どもの意思や思いが尊重されない保育に対する疑問があった。また、「担当制・流れる日課」では、1週間の勤務日が少ない職員において、「迷惑にならないか」という疑問があった。

## 5) 課題

「一斉保育」においては、「方法」ではなく「大切にしたいこと（価値観）を一緒に考えること」、「遊びの環境の貧しさ」、全員が同じ活動を行う中で、子どもが主体的に生活することの難しさなど、保育の質の向上に関する記述があった。一方で「担当制・流れる日課」では、「子どもの発達などもっと深く学ぶこと」、「より興味を持って遊べる環境を用意すること」、「肯定的な言葉のかけ方」など、保育士自身の学びや実践力の向上に関する記述、更に「保育者間で共通の考え方」、「打ち合わせ」など大人同士の共通理解に関する内容であった。

## (2) 考察

上記より、「一斉保育」では、子どもを大人に合わせる「大人主体の保育」が、結果的に子どもの意思や思いの尊重がなく、一人一人の子どもへの理解が不十分な保育内容につながっていると考えられる。また、そのことは、怒ることや待たせることが多く、一人一人に寄り添うことができなかつた保育士自身の反省へとつながり、さらに、一斉保育そのものの質的な向上の必要性への課題意識となっている。

一方で「担当制・流れる日課」では、一人一人の子どもを大切に「子ども主体の保育」を実践することで、一人一人の子どもを尊重し、多面的な理解に努める保育士自身の変化をもたらしていると考えられる。また、このことが保育士自身の学び、実践力の向上や大人同士の共

通理解という課題意識となっている。なお、出勤日の少ない保育士の子どもの関わり方についても、共通認識できるようにすることで、保育の質の向上は、さらに良い循環をもたらす可能性があると考えられる。

#### 4、まとめ

Y保育室の87.5%の保育士は「一斉保育」の後に「担当制・流れる日課」を経験していた。「一斉保育」から「担当制・流れる日課」を実践したことにより、「乳児保育の価値観」も「保育士の役割としての価値観」も変容していた。「担当制・流れる日課」における2つの価値観に共通しているのは、子どもを中心とした関り（図4、図5）であり、乳児保育として大切なことは、子どもの利益のために、大人同士が連携し、保育士一人一人が子どもを信じることによって、保育士と子どもの信頼関係を通した相互関係を持つことであると言える。また、その保育士一人一人の役割として大切なことは、子どもに寄り添い、理解して応答的に関わることで信頼関係を結ぶことであり、これらの全ては子どもを大切にすることであり、そのためには環境を整えることであると言える。なお、ここでいう「子ども」とは、回答者の記述から「一人一人の子ども」を指し、「担当制・流れる日課」の実践の中においては、常に一人一人の乳児を主体とした価値観が存在していることが明確となった。

一方で、一斉保育の中では、子どもの意思や思いの尊重がなく、子どもを大人に合わせる大人主体の保育であった。そのため、一人一人の子どもへの理解が不十分であり、保育士はそれらのことを怒ったり、待たせたり、一人一人に寄り添えなかったことを反省している（表3）。つまり、一人一人の子どもを中心とした価値観がなく、子どもの利益や子どもを大切にすることに繋がらなかったといえるであろう。

今回の調査では、価値観が変容して保育が変容したのではなく、保育方法が変わったことで、乳児保育や保育士の役割として大切なことは何かと

いう価値観が変容した。それにより、子どもへの関りは、子どもへの理解が不十分であり、怒ったり、待たせたり、一人一人に寄り添えなかったことから、子どもに寄り添い、理解して応答的に関わる子どもを中心とした関りとなって変化し、一人一人の子どもへ直接的な利益として影響があったと言える。また、一人一人の子どもを中心とした価値観ができたことで、保育士はさらに子どものためにと自身の学びや実践力の向上を課題としている（表3）。これらは生まれて間もない乳児が家庭から離れて一日の大半を過ごす保育施設の中で、大人から大切にされ、主体として生きることを認められる中で心身ともに健全に育つことを意味し、乳児保育の質の向上につながると考えられる。

## 5、今後の課題

今回は、担当制・流れる日課の実践を行う中に限定して乳児保育と保育士の役割における価値観および以前との変化について質問した。それぞれの価値観は、保育方法が変わることで変容したことは明確となった。しかし、一斉保育など別の保育方法において、乳児保育と保育士の役割にどのような価値観があったのかについては質問しておらず、変容した内容については明確になっていない。

今後は、価値観の変容した保育士にインタビューし、一斉保育ではどのようなことに価値観をおいていたのかについて調査するとともに、保育方法の価値観の違いが、乳児の心や体の育ちにとってどのような影響があるかについて調査し、保育の質の向上についての研究を進めることで一人一人の乳児の幸福に還元する。

## 引用・参考文献

初塚真基子「第2章 母子関係はいつごろからできるの？-愛着と自立-」『古橋紗人子編著、川原佐公監修赤ちゃんから学ぶ「乳児保育」の実践力—保育所・家庭で役

## 乳児保育の価値観の変容

- 立つ一』保育出版社、2014年
- 伊藤美保子、宋高弘子、西隆太郎（2015）「一人ひとりを大切に作る保育：0歳児クラスの担当制による乳児保育の観点から」『ノートルダム清心女子大学紀要 人間生活学・児童学・食品栄養学編』39巻1号、124-132
- 神谷良恵（2018）「子ども主体の保育方法」同朋大学社会福祉学部編『子ども学入門』同朋大学、59-72頁
- 神谷良恵（2019）「おむつ交換を通じた保育士の保育観の変容—保育士と乳児の応答関係に注目して—」『ホリスティック教育/ケア研究』第22号、73-86
- 厚生労働省（1947）「児童福祉法」  
[https://www.japaneselawtranslation.go.jp/law/detail\\_main?id=11&vm=1、](https://www.japaneselawtranslation.go.jp/law/detail_main?id=11&vm=1、)  
2020.9.14
- 厚生労働省（2017）「保育所保育指針」  
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf、>2021.1.2
- 厚生労働省（2019a）「【公表用】③保育所等関連状況取りまとめ（平成31年4月1日）」  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000544879.pdf、>11.3
- 厚生労働省（2019b）第7回検討会資料1-2  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000631123.pdf、>2020.9.14
- 文部科学省（2014）「子ども・子育て支援新制度の解説資料1、制度概要その3」  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1350046\\_03.pdf、](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1350046_03.pdf、)2020.9.14
- コダーイ芸術教育研究所（2005）『ハンガリーの保育とあそび』明治図書
- コダーイ芸術教育研究所（2006）『乳児保育の実際 子ども的人格と向き合って』明治図書
- 松浦浩樹（2020）「子どもにふさわしい園生活と保育形態」大豆生田啓友・渡邊英則編著『新しい保育講座⑥保育方法・指導法』第3章、ミネルヴァ書房
- 西村真美（2019）「3歳未満児の保育における担当制の運営実態についての考察」『帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要』第4号、87-95
- 野澤祥子、淀川裕美、高橋翠、遠藤利彦、秋田喜代実（2016）「乳児保育の質に関する研究の動向と展望」（『東京大学大学院紀要』56、399-419
- 大豆生田啓友（2020）「保育方法とは何か？」大豆生田啓友・渡邊英則編著『新し

神谷良恵

い保育講座⑥保育方法・指導法』第1章、ミネルヴァ書房  
サライ美奈著、全国私立保育園連盟保育国際交流運営委員会編（2014）『ハンガリー たっぷりあそび就学を見通す保育』かもがわ出版  
境 愛一郎（2012）「子ども理解の方法としてのKJ法 子どもの遊びの姿から学びを可視化する」中坪典史編『子ども理解のメソドロシー』第2章、ナカニシヤ  
UN Committee on the Rights of the Child (CRC), General comment No. 7 (2005):  
Implementing Child Rights in Early Childhood, 20 September 2006, CRC/C/GC/7/Rev.1,  
UN Committee on the Rights of the Child (CRC) (=平野裕二訳『子どもの権利委員会 一般的意見7号(2005年) 乳幼児期における子どもの権利の実施』  
[https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights\\_library/treaty/data/child\\_gc\\_ja\\_07.pdf](https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights_library/treaty/data/child_gc_ja_07.pdf)、2020.11.3  
山本佳子（2015）「乳児保育における『ゆるやかな担当制』についての提言」『中国学園紀要』14、177-184

※ 「『同朋福祉』に関する内規」により「研究ノート」として査読済み  
（本学専任講師：乳児保育Ⅰ）